

ほ場整備と五人会

去る6月初旬、センチュリーローヤルホテル23階の一室で、半年ぶりであろうか、「五人会」なるメンバーが集まり、四角の卓を囲み会合が始まった。

東方にT氏、西方にK氏、南方にY氏、石狩湾を一望に出来る窓を背にした北方に私が座り、「始めるか」と声を掛けると会合は無言のうちに進められて行った。

暫くして、K氏が「もう、20年になるね」と発言する、それに答えるかのように、T氏が「20周年記念でも開こうか」と提案する。「何処で開く」とY氏も話に乗る。私は言った「旭川かな」。もうあれから、20年にもなる。ほ場整備事業の創生期、道営並みの助成措置を受けた特別団体営のほ場整備が始められた翌年、土地改良課にはほ場整備係が新設され、その一員として私も加えられることとなった。

当時、所得倍増、工業立国論の風潮に煽られ、金の卵ともて囃された、若年労働者達が工業労働力として、農村を旅立って行った。

必然的な結果として、農村の過疎化を、生産性の低下が深刻な問題として取り上げられ始めたのも、この頃である。

農林省も、このような農産業の落込みを、なかば社会趨勢として認めながらも、省力化によって生産力を維持しようと大型農業機械の導入を目論み、ほ場整備事業にこれらの問題解決の糸口を求めようと、非常な意欲を見せていた。

今でこそ、省力化ほ場の造成は極く当り前のことであり、特別な技術論議を要しはしないが、その頃は区画の大きさ、形状から小用排水路、畦畔の構造から埋設暗渠の方法など、全てについて未知なものであり、適格な設計や積算の手

法確立が急がれたものである。

最盛期には160地区を超えたこの事業も、始めは数地区に過ぎず、係の末席に位置したT氏と私は予算事務より、むしろ設計積算方法や歩掛をどのようにするかの調査解析を主な仕事として与えられていた。

調査解析の第一歩はまず現場でと、初めての調査に旅立ったのが、滝川に近い特別団体営地区の「江部乙」であった。

当時、現場の事務所は農協や土地改良区の一室を借りたり、良くて借上家屋を利用するのが普通であったが、12号線に面した一銭見世屋のような事務所に着いて見て、なんとチンケな事務所かと思ったものである。

今では面影もないが、精悍な容姿をしたK氏とH氏に私達は迎え入れられ、早速札幌から持参した謄写インクのかすれた機械の軌跡調査表や工程時間の記録紙を取り出し、調査の目的や方法を説明しようとしたところ、両氏は「上がって寛ろいでから」と一間しかない室に私達を招き上げたものである。そこには四角な緑色をした卓が夕日を受け鎮座していた。卓は説明の机に変わり、また卓本来の姿を取り戻すなどして、調査の間、四人の最も重要な場となったのである。

このままで話が終わりに近づけば「ほ場整備と四人会」にタイトルも変わったであろうが、調査は今一つの現場「上忠別」をも対象としており、数日後に旭川から駆けつけたY氏も、この卓で説明を聞き、一つ穴のむじなとなってしまったのである。

あれからはほ場整備事業の発展と同じくして「五人会」と銘打ったこの集まりも活発な活動を見、

今は、民間に転出したY氏も、町の幹部となったH氏も、未だ電話一本で仕事の合間を見ては、この会合に参加している次第である。

最近では、水田転換だとか休耕だとか、かつての食糧確保の重任を果たした水田ほ場に対してその風当たりは冷たく、事業も低迷する傾向が続いているようであるが、十年ほども付き合ったこの事業は私にとって思い出の深いものである。

室の戸をたたく音がする。町議会を終え、L特急で駆けつけて来たH氏であろう。今日も活発な会合が続けられることであろう。

ちなみにT・K・Y・Hの四氏とは田湯伊三男、樫野喜明、山口堅司、広田豪の四氏のイニシャルである。なおこの五人会の会員の募集は未だ行われていないことを申し添える。

(昭和59年9月 北海道土木工業新聞社「農地開発行政のあゆみ」)